

# 西日本読書感想文コンクール 奨励賞

雲雀丘学園小学校 一年

## 『かきたいからかくんだよ。』

えをかくことがだいすきなぼくは、ほんやさんで、きつねがたくさんのかいりんごをスケッチしているひょうしのほんをみつけました。うさぎといっしょにいるきつねは、とてもたのしそうにえをかいっています。ぼくとおなじようにほんとうにえをかくのがすきなんだなおもい、このほんをえらびました。

きつねはぼくとおなじようになんでもえにかいっていました。さんすうのノートのすみっこ、チラシやつつみがみのうら、じめん。ぼくもコピーにしつぱいしたかみのうら、クッキーをつんでいたかみのうら、とばなかつたかみひこ

うきのうらにたくさんえをかいています。だから、リビングやじいじとばあばのへやのかべは、ぼくのえでいっぱいです。どうして、じぶんのへやのかべじゃなくリビングやじいじとばあばのへやのかべにえをはつてているかというと、それにはりゆうがあります。リビングにはかぞくみんながあつまるので、みんながぼくのえをみて、ほめてくれるからです。ほめられるとつてもうれしくなつてどんどんかいてしまします。でも、きつねのようになんにえをかくことがすきだつたのに、やまねこやあひるにせつかくかいていたバツタのえをわらわれたり、いろのぬりかたをちゅういされたら、ショックでじしんがなくなつてしまします。だから、どうしてもみんながおどろくようなもつとすごいえをかきたかつたんだとおもいます。でも、えをかくたびにみんなに「すごい」「じょうず」つてほめられることばかりかんがえてえをかくなんて、ぼくはしんどいです。だつて、えをかくことがだいすきだから、ぼくがおもつたようになんじたようにすなおなきもちでこころをこめてかけたら、だいまんぞくです。そんなきつねもうさぎのへやにかざつてあ

つたきつねがかいしてたえをみて、やつといせつなことにきづきました。かきたいからかいた。かきたいからかく。かきたいものをかく。それは、うさぎのかおでした。

「それで、いい！」

磯みゆき

ポプラ社



# 青少年読書感想文コンクール 宝塚市審査会 通過作品

「給食室のいちにち」を読んで

雲雀丘学園小学校 4年

ぼくは給食室を見たことがなくて、給食室が何かを知らなかつたので読むことにしました。ぼくの小学校のお昼ごはんはおべん当なので、学校に給食室がありません。たくさん注意をしながらごはんを作る給食室のことを初めて知つて、おどろきました。そして、お母さんと話をしながら何回も読むと、今まで知らなかつた給食室ではたらく人と、いつもぼくのおべん当を作つてくれているお母さんの共通点がありました。それは、食べる人のことを考えてごはんを作つているということです。

給食室の人たちが、お肉やできあがりの温度をチェックしている場面があります。お母さんも材料を、買い物の時と使う前にチェックし

て、温度はおべん当のふたをしめる時に注意しているそうです。ぼくにはアレルギーはありませんが、下ごしらえしたりせいけつにして、ぼくが安全に食べられるように作ってくれています。給食室の人もお母さんも、ぼくがそこで安全に食べられるように作ってくれていいです。給食室の人もお母さんも、ぼくがそこまでしていてすごいなと思うし、食べる人のためにいっぱいにしていることが、かっこいいと思いました。

ぼくは、小学校に入った時からずっと口ナカで、みんなとおべん当の話をすることがあります。ひとりで前を向いて食べないといけないし、しゃべることができなかつたからです。でも今は、机をくつつけて食べることができるのでも今は、みんなでおべん当を見せあうこともできるし、おべん当の話をできるようになりました。自分たちの好きなおかずや、うらやましいおかずの話をしながら楽しく食べていいます。ぼくのおべん当をみんながのぞいて見てくれるとうれしいし、みんなのおべん当を見るのも楽しいです。ひとりひとりちがつたおべん当なので、きつとみんなのおべん当も、みんなとこのことを考えて作つてもうつていたんだな

思いました。おべん当のいいところは、「いただきます」をしてから、ふたを開けるまでわくわくして、開けたしゅんかんに「わー！」とうれしくなるところです。毎日ぼくの好きなおかずがあつたので、お母さんはぼくのことを考えて作ってくれていたんだなと思いました。給食室のことを探りましたが、給食室の作る人のことを知つたら、おべん当を作るお母さんのこともわかりました。

給食室の山川さんが、空っぽのワゴンを見て大よろこびをしていました。空っぽになるということは、「おいしく食べたよ」という食べられた人からのメッセージなのかなと思います。ぼくもおべん当がおいしいので、いつも必ず空っぽにして、お母さんに「おいしく食べたよ」を伝えたいと思います。今はマスクが取れたから、みんながおいしそうに食べる顔も見えるので、みんなのおべん当を作つた人に、「おいしく食べててるよ」を見せてあげたいなと思います。



# 青少年読書感想文コンクール

宝塚市審査会 通過作品

「医師として人としての人助け」

雲雀丘学園小学校 5年

私の将来の夢は医師になることです。さまざま病気で苦しんでいる人を助けたいからなりたいと思っていました。この本を読書感想文のテーマに選んだのは、主人公が実在したお医者さんだつたからと、ニュースで中村先生の事件を聞いたからでした。私にとってアフガニスタンという国はとても遠くてどのような国なのか想像もつかない国です。戦争のニュースを聞いたりするのでその国名だけは知っている程度です。この本を読んで、アフガニスタンの一般市民の方々の暮らしを少しだけ知ることが出来ました。戦争が起こっている国で暮らしている方々は皆が戦争に賛成をしていて武器を持つて戦つたり避難生活で大変だと思つて

いましたが、実際は、もちろん避難生活で大変ですが、戦争的な考えとは関係なく、日常生活を戦争の中で過ごしていることを知り、驚きました。私が想像もつかないような過酷な状況の中での日常生活はいかに大変な事だろうと悲しい気持ちになりました。

私たちが普段当たり前に使つてている水やいつも手に入る食料・薬・教育の機会は、国によつてこんなにも違うのだと驚きました。中村先生は医師である前に人として人助けをなさつた方なのだと思います。言葉だけで無く行動すること、誰よりも前に出て自分で動くことはなかなか出来る事ではありません。この本の中には写真ものつていて実際に先生が危険をかえりみず土木作業にあたついた様子が見て取れました。また、今でも中村先生の弟子たちが、アフガニスタンへと向かい給水や治りようをするというすがたが昔から今まで渡された命のバトンのようだと思いました。この本の表紙のうらに書いてある「この本の売り上げの一部は、ペシャワール会の活動のために使われます」という一つ一つの細かな取り組みが、みんなを助ける命のつながりのような気がして

感動しました。私は中村先生の様に素晴らしい人物でもないし、能力があるわけでも無いけれど、何が出来るだろうと考えました。外国で困つている人を助けたいと思うとき、食料や薬を分けられたらとおもつっていましたが、そもそも水が無いことを知りませんでした。どんな状況でも、相手の本当に必要としている事を考えられる様で無いと本当の意味での人助けにはならないのだろうと改めて思いました。小学生の私が出来る事は限られていますが、将来、人の役に立つことが出来る人になるために、相手の立場に立つて考え方を付けたいと思います。先生の言葉に以下の様な物があります。「人は見ようとするものしか見えない」これは私の日常生活でも当てはまる事だと思います。忘れそうになるたびに読み返し、小さ事を大切にして生活して行きたいと思わされる本に出会えてよかったですと思いました。

